

忘れられるのは誰か

— 『修道士』 試論 —

針 生 進

古典であるがための不幸をマシュー・グレゴリー・ルイスの『修道士』（1796）も免れてはいません。古典とは、その内容にかかわるさまざまな情報に将来の読者がさらされている書物との定義もできるのです。何の予備知識もないまま、例えば『ジキル博士とハイド氏』の表紙を開き、物語の意外な進行に乗せられ、予想もしない終局に導かれる楽しみを味わえる初読者は今ではごく少ないはずですが（それでもなお、同作品がその好例であるように、読みはじめれば思わぬ発見がある作品こそ古典との定義もできるけれど）。ステイーヴンソンの怪奇小説ほど世に知られていないとはいえ、『修道士』の未読者も警戒を怠れません。18世紀末に書かれたこのゴシック小説について、詳細な論文から短い紹介文までのほとんどが「ネタバレらし」という大罪を平然と犯しているのが現状なのです。幸運にも、あるいは用心を重ねて、白紙状態で原典を手にしたとしても油断はできません。冒頭から機会あるごとに注意深く伏線を張りながらも、小説のぎりぎり最後まで（全編442頁にわたる使用テキストの439頁まで）作者が隠し通してきた事件の真相のいくつかを（購買意欲をそそるためか）本の裏表紙などが明かしている場合もあります。それらの真相がここでの論旨にかかわるのであれば、上述の罪を犯して本稿も例外ではないとお断りしておきます。推理小説を論じるときと同じ危険信号をここで発しておく次第です。

とはいえ、その大半を読み終えてもまだ、『修道士』を「推理小説」とは呼べそうにありません。凶悪犯罪は起こるとしても、解明すべき謎など

見当たらないからです。犯人、犯行方法、動機、すべて明らかです。犯されるのは計画性なき衝動殺人です。犯人は誰か、犯行の瞬間を目撃している読者には間違いようありません。マドリードのカプチン会修道院の若き院長アンブロシオにほかなりません。都中から聖人とも讃えられる修道院長は美少女アントニアに悪しき欲望を抱き、わがものにしようとひそかに画策します。その妨げになった彼女の母親を思わず手にかけてしまいます。追いつめられた果てには、アントニア本人の命をも奪い、逃げ去るのです。

しかし、彼が逮捕されてから終幕近く、状況は一変します。探偵役を引き受ける者が登場し、院長本人を前にして、隠されていた事実を暴きはじめるのです。犯罪は偶然の成り行きのように見えて、裏でひそかに糸を引いている者がいた、と探偵役は説いてみせます。その者が殺人計画をねり、計画のままにアンブロシオが凶行に走るように遠隔操作をしていたと指摘するのです。さらには、影で操作していたのは、つまり真犯人は、誰でもない自分だと明かしもするのです。推理小説の定石どおりに用意されているこの「衝撃の結末」こそ、正統派推理小説としての『修道士』の致命傷にほかならないと急いでつけ加えなければなりません。探偵自身が犯人であってはならないという禁則に違反しているからだけではありません。超自然な要素を物語に介入させるという禁じ手も使われているからです。⁽¹⁾ 探偵にして真犯人とは、雷鳴と稲妻と旋風を従え「天上から落ちて以来の変わらぬ醜悪な姿で現れた」⁽²⁾ 悪魔ルシファーだったのです。手足には長いかぎ爪、肩からは1対の大きな翼、髪の代わりに何匹もの生きた

(1) 鈴木幸夫訳編『推理小説の詩学』(研究社、1976)所収のロナルド・A・ノックス「探偵小説十戒」、135-151を参照のこと。

(2) Matthew Lewis, *The Monk* (Oxford World's Classics: OUP, 1998), 433. 以下、『修道士』からの引用は同版により、カッコ内に頁数を記す。引用文中の[...]は中略を示す。第一次、第二次の両資料の英語原文からの和訳は、特に明記しない限り、すべて私訳による。

蛇がうごめく魔物であったのです。

修道院長を重大犯罪に向かわせるだけでなく、その罪の代償を要求しても悪魔は魔力を操ります。悪魔が下すのであれば、執拗にして容赦なく苛酷な処罰であって当然です。殺人罪に問われた院長は、黒魔術を使った容疑でも異端審問所の獄舎につながれます。そこでの尋問からして執拗にして容赦なく苛酷なものになります。「人間の残酷性が考え出したなかでも最悪の拷問の苦しみ」（424）をどうにか耐えて牢に戻ってきたアンブロシオのもとに、共犯として収監されていたはずのかつての愛人マチルダがどこからともなく現れます。牢獄には場違いな華美な衣装に身をつつみ、自分がすでにそうしたように、悪魔と取引をすれば、監禁と拷問と刑罰の責め苦からすぐにも解放されると語りかけてきます。語り終えれば、どこへともなく消え去り、悪魔を呼び出す呪法を記した本が牢内に残されるばかりです。今まで彼女から幾度も聖職者たる道に背く誘いをかけられたときと同じように、ここでもアンブロシオは迷い、逡巡します。しかし、再度の拷問の痛苦に耐えかねて犯行を自供し、火刑の判決が下されると、もはや誘惑に抵抗する気力もなくなります。そして今度も悪しき選択を、最後にして最悪の選択をしてしまうのです。救いを求めて契約を交わした悪魔は、救ってくれるどころか、魂を売り渡してまで逃れようとした苦痛と恐怖以上の責め苦でアンブロシオを断罪することになるのですから。

悪魔を呼び出してからもまだ、取引に応じる決心がつかねるアンブロシオです。それでも、刑場へ自分を連れ出しにきたのだろう、衛兵たちが地下牢に近づく足音、看守が牢の鉄扉の錠を開ける音を耳にすれば、差し出された契約書に自らの血で署名するしかなくなります。囚人の魂をもらいうけるとすぐに、悪魔は獲物の腕をつかみ、翼を広げて飛び上がります。独房の天井が割れ、そこから彼らが逃げ去れば再び閉じられます。地獄への案内人は、はるか辺境の山岳地帯にまで飛びつづけ、荒涼とした断崖に降りたちます。猛禽類の巣が囲むその場所、岩場に縛られ禿鷲に生身

をついばまれたというプロメテウスの刑場を思わせるその場所がアンブロシオの新たな処刑場となるのです。

刑の執行を前に、衝撃の真相の波状攻撃がアンブロシオを襲います。肉体を引き裂く前に、思いもよらぬ事実を彼に聞かせて、死刑執行人は受刑者の心から切り裂きにかかるのです。まず、彼が修道院内にかくまっていた美女マチルダの正体が明かされます。院長を誘惑し、転落させるために悪魔が送りこんだ密使だったというのです。院長が愛蔵していた聖母画の聖母の似姿に悪魔の1番弟子が化けて、修道院に入りこんでいたというのです。「悪魔は自由自在に、かならず人の好む姿を借りて現れるという」⁽³⁾わけです。次には、アンブロシオ自身の出生の秘密が明かされます。邪恋の相手アントニアとの濃い血の関係が、となれば彼女の母エルピラとの血縁も明らかにされるのです。『人の道を踏み外した親殺し、妹まで犯した色魔』(440)とアンブロシオを蔑む一方で、そのような醜行に向かわせた自らの手腕を悪魔は誇らしげに語ります。『マチルダをおまえのもとに差し向けたのはこのおれだ。アントニアの寝室に忍びこめるようにしてやったのもこのおれだ。その娘の胸を刺し貫いた短剣を用意したのもこのおれだ。実の妹へのおまえの悪巧みを夢のなかで母親のエルピラに警告したのもこのおれなのだ』(同)。そして、とどめの一撃が加えられます。牢内であと少しだけ誘惑に耐えてさえいれば、近づいてきた靴音は彼を刑場へ連れて行くどころか、赦免を伝えにきた獄吏のものとわかったはずだ、悪魔と取引などするまでもなかった、おまえはすでに極刑を免れていたのだと告げるのです。これらがすべて正しい情報かどうかを知るすべはありません。相手に絶望を強いる嘘なのかもしれない。悪魔ならやりかねません。だとしても、それらを聞くアンブロシオの反応には一切ふれられていません。次々に聞かされる思いもかけない真相に反応しようにも追いついていけない呆然自失状態が暗示されるばかりなのです。

(3) 『ハムレット』第2幕、第2場からのこの引用は福田恆存訳を借用した。

そうまでして、なぜ悪魔はアンブロシオの神経を苛み、追いつめるのか。と問う前に、誘惑を退け、過ちを犯すことなく、一途に修行を重ねてきた修道僧になぜ悪魔は狙いをつけたのか。悪魔の言いは次のとおりです。『おまえこそ、おれの餌食だと前から目をつけていたのだ。おまえの心の動きをずっと見守ってきた。そしておまえが高徳の士と褒め称えられる身になったのも虚栄心からのことであり、信仰や信条からではないと見定めることができた。そして、ここぞという好機をつかんだのだ』（同）。この告発には、告発された本人も反論できないはずです。小説がはじまってもなく、若くして聖人との称賛を一身に浴びる修道院長の裏の顔が暴かれているからです。満席の聴衆を感動させた説教を終えて個室に戻った院長は「1人になるとすぐにも、思うさま虚栄にふけるのだった。自分の説教がまきおこした熱狂を思い返しては歓喜に酔った。強大な存在となったわが姿が目にもまぶしく浮かんできた。意気揚々とあたりを見渡せば、おまえよりも優れた者など誰もいないと、驕れる心が声高に語りかけてきた」（39-40）。聖者とも称される者がおよそ聖者らしからぬ慢心と偽善におぼれているのなら、それら邪心をさらにかきたて、さらに悪しき方向へと導く——これこそ悪魔の悪魔たる務めであり、喜びなのです。

あまりに超自然な展開のために、最終章でアンブロシオを次々に襲う出来事は獄中で囚人が見た妄想にすぎないのでは、とも思われてきます。満都の称賛を一身に浴びていた名士が、抑圧と解放、苦痛と快楽、焦燥と歓喜との間で急上昇、急降下を重ねた後に死刑囚となり果てるのです。何か妖しい幻影を目にしてもおかしくはありません。ただ、囚人が独房から忽然と姿を消した現場を衛兵と看守は確かに見ているのです。警備も厳重な獄舎のなかから、どこへ、どのようにして逃げおこせたのか。見当もつかない彼らにも「牢内を満たす硫黄の刺激臭だけでも、何者の手によって囚人が救い出されたのか推察するには十分だった」、そして「黒魔術師アンブロシオが悪魔に連れ去られた話はマドリッド中に噂となって広まった」

(438)。

妄想というのなら、投獄される前からアンブロシオはこの世ならぬものを目にしていたというべきです。物語がはじまる前からすでに、悪魔の秘術が出現させた幻を見せられていたのですから。幻のように美しいマチルダになりすまして(彼女自身も少年僧ロサリオと二重に身を偽って)悪魔の手先が修道院に入りこんだのは、小説がはじまる時点からさかのぼる3ヵ月も前のこと。牢獄内で精神錯乱をおこしてはじめて幻覚症状に陥るというより、むしろ逆です。牢内に現れた悪魔に教えられてようやく、今まで見せられていた幻覚から目覚めるのです。巧妙かつ冷酷に立てられた陰謀のままに踊らされていたと思いたるのです。とはいえ、「迷信という専制権力が支配する都」(7)の空気ばかりが小説を濃くおおうわけではありません。修道院長だけが主要登場人物ではなく、修道院だけが小説の表舞台とも限りません。幻覚にも似た色欲に堕ちていく破戒僧の物語への解毒剤ともなる、もう1つの物語も並行して語られていくのです。

『修道士』は、2つの物語を交互に組み合わせることで進行していきます。章が改まるたびに(原則として)今まで語られてきた物語が中断され、別の物語に道譲るのです。一方には、小説の表題になっている、であれば小説の主筋といえる、カプチン会修道院の院長アンブロシオの転落の物語。もう一方には、メディナ公爵の甥にして公爵家の後継者ドン・ロレンソと友人の2人の青年貴族、ドッソリオ伯爵ドン・クリストバルとシステルナス侯爵ドン・ラモンたちの恋と冒険の物語。前者よりも多くの頁数が割かれているのであれば、こちらの方は脇筋だとして片づけるわけにもいかなくなります。どちらが主筋で、どちらが脇筋なのかと問われれば迷うところですが、だとしても、2つの物語がたがいに相容れない世界を描き、相容れないままに終わることだけは確かであり、強調してもおきたいところです。

孤児として拾われた修道院から30年近く一歩も外へ出ることをわが身

に許さず、厳しい修行と戒律に明け暮れてきたアンブロシオが一方にいます。情欲におぼれてから（恋人のもとを訪れようと、禁を破って修道院の外へ出て）行動範囲が少しは広がるとしても、もとより狭い視野はさらに狭まります。肉欲の充足しか見えてこなくなるのです。他方、欧州各地を旅しては恋愛沙汰や冒険を重ねてきた名門の若者たちがいます。出自も定かではない捨て子であったアンブロシオとは反対に、由緒正しく緊密な血縁関係こそ彼らの拠り所です。「『私の名はマドリードではよく知られていますし、私の家系は王宮でもそれなりの力をもっているのです』（10）と青年貴族ロレンソは自負しています。修道院長アンブロシオも生ける聖人たる令名を王都に誇ります。とはいえ、貴族という世俗の権威が若き聖職者には未知の領域であるのに対し、若き公爵は教会権力への疑念と嫌悪感を隠そうともしません。「僧院なところでは、いかに途方もない悪習がはびこっていることか、僧衣をまとう者なら誰にでも尊敬の念を捧げてしまえば、いかに大きな間違いを犯すことになるか。偽善者たちの正体をあばき、神聖なる外見が常に徳に満ちた心を隠しているとは限らないことを同胞たちに知らしめる機会を〔ロレンソは〕待ち望んでいた」（345-6）。「神聖なる外見が常に徳に満ちた心を隠しているとは限らない」とは、そのままアンブロシオその人に対する訴状の1節とも読めます。しかし、ロレンソ自身は「僧衣をまとう者」のなかで修道院長にだけは、その説教にわれを忘れて耳を傾けこそすれ、何の疑念も敵意も抱いてはいません。「神聖なる外見」以外の印象を抱こうにも、個人として彼と接触する機会が1度もないからです。院長が修道院のなかに閉じこもりつづけているからではありません。2人が市内で遭遇する機会がないわけではないのです。ロレンソも訪れている恋人の家へ、院長はひそかに、しかし大胆にも（シエスタのために街に人影がなくなるのをねらって）真昼に、それも足繁く外出もしているのですから。それでも実際には、彼らが再会する機会は来ることはないのです。

2つの別々の物語を並べて語りついでいく構成をとりながらも、それぞれの物語の登場人物たちがどのように知り合い、かかわりあっていくのだろうかという、読者なら当然抱く期待を『修道士』は裏切ります。その2つを切り離す方にこそ、意を用いているといえるほどです。章が変わるごとに2つの舞台はそれぞれ前景から背景へと入れ替わります。これは、しかし、小説全体を見渡せる読者だけに特権として許された遠近法にすぎません。前景にいる登場人物には、小説の読者には見えている背景(同じマドリード市内を舞台にしたもう1つの物語の情景)は見えてこないのです。修道院長は自分の恋人にロレンソという恋敵がいることさえ知らず、知らないままで退場しています。修道院という治外法権領域、裏を返せば、外の広い世界から隔てられた陸の孤島にも情報は届きます。「人の目には見えない私の召使からもたらされた」(270)知らせとして、アントニアが高貴な身分の青年に恋しているとマチルダはアンブロシオに告げています。けれど、その若者の名だけはなぜか明かしてはいません。そのために、後にロレンソが近くに來ていると地下道のなかで彼女から教えられても、アンブロシオには誰のことなのか分からないでいるのです。そのロレンソとはいえば、修道院長の説教を聴いて深く感動しています。だとしても、その後、小説が終わるまで、その感動を思い返すことはありません。院長の姿を再び見ることもありません。院長の名を口にすることさえありません。妹アグネスを死の淵にまで追いやる手助けをしたのが、高名な院長その人だと気づきもしません(後にその事実を知ったという記述もありません)。愛するアントニアに修道院長が邪まな欲望を抱いているなど想像外のことなのです。

2つの物語を隔てて、ありえないことさえ起こります。両者それぞれの時間の進行速度に差が生じるのです。アンブロシオの物語のなかで動く時計は、いつのまにかロレンソ側の時間を追いこしてしまうのです。そうなるまでの経過、小説の半ばあたりまでの展開を以下にあとづけておきま

す。

その後はすぐに別方向に別れていくとしても、2つの物語は同じ場所を起点としてはじまります。それぞれ異なる世界に属する主要登場人物たちがカプチン会修道院の教会堂に集まる場面からです。週に1度木曜日にだけ公衆の前に顔を見せる修道院長が説教壇に上ります。会衆席はすでに聴衆であふれています（「これら群集が信心深い動機から、でなければ教を請いたいとの熱い思いから集まってきたのだと早合点してはいけない」（7）との注釈が急いで加えられますが）。聴衆のなかにロレンソとクリストバルの姿が見られます。後見人である叔母レオネラに手を引かれて、美少女アントニア・ダルファも現れます。やがてはじまる院長の説教にロレンソも、彼が席を譲ったアントニアも強く胸を打たれます。ひとたび説教をはじめれば「神の功德になど縁のない人たちでさえアンブロシオの雄弁に心を奪われた」（18）というのですから。とはいえ、説教壇の向こう側とこちら側の間にそれ以上の接触はありません。これから小説の最後まで、若き貴顕紳士たちが修道院長と出会うことはないのです。アントニアも、院長とは「もう2度とお会いすることもないでしょう」（20）と嘆息します。この予感だけは、修道院から帰る彼女にジプシーの女占い師が予言するように、不幸な形ではずれることになるのですが。

アントニアが去り、クリストバルとも別れたロレンソは、隣接する聖クララ女子修道院を訪れようとしています。今はそこで修道女として暮らす妹アグネスに面会するためにです。しかし、アントニアの面影を追って1人、暗い教会堂にとどまるうちに思わず眠りこんでしまいます。その夢のなかで彼女と再会します。場所は同じカプチン会教会。花婿である自分をさし招く花嫁姿のアントニアを腕に抱こうとすると、見知らぬ魔物のような大男が乱入してきて彼女を奪いとります。教会堂は崩れ落ち、その跡に現れた炎を吐く地割れのなかに引きこもうとする男の手を必死の抵抗で振り切った彼女は、天上での再会を未来の夫に約束して昇天していくのです。

この不吉な夢から覚めたロレンソの目に、マントに身をつつんだ不審な人影が映ります。聖者像の台座の下に1通の手紙を隠して、その人物は堂内の物陰に隠れます。好奇心をくすぐられはするけれど、自分とは縁のないことだと外に出た彼に、戻ってきたクリストバルがぶつかります。修道院から1歩も出ようとしない院長に告解聴聞をうけてもらうために、尼僧たちのほうから修道院まで出向いてくると急いで伝えにきたというのです。すぐにも、尼僧院長に引き連れられて尼僧たちが現れます。そのうちの1人が先ほどの密書を取り出すのを見たロレンソは、それが妹だと知ります。手紙が渡ったのを見届けて教会堂から出ようとする先ほどの怪しげな人物を問いただすと、システルナス侯爵家の長子であり友人のドン・ラモンだとわかります。事情を説明するという彼に連れられ、ロレンソはシステルナス侯の屋敷へと向かいます。

若き修道院長の運命の急転がはじまるのは、時間が少し後戻りした次の第2章からです。説教を終え、礼拝堂での夕べの祈りもすませた彼は、聖クララ女子修道院の修道女たちの告解聴聞をはじめます。そのなかの1人の僧衣から落ちたものを拾ってみると、尼僧院脱出の手はずを書き記した恋人からの手紙です。落とし主のアグネスの懇願にもかかわらず、アンブロシオは尼僧院長に事の次第を伝えます(ほんの少し前に教会堂を後にしていたロレンソとラモンはこの間の事情を知ることはありません)。自分の監督下にある修道女の不始末を、ほかでもない修道院長アンブロシオに知られるという恥辱をうけた尼僧院長がアグネスの「ささいな罪」に「厳しく、苛酷この上ない」(47)懲罰を下すのは避けられなくなります。「自分の尼僧院の名をほんのわずかでも汚すような不祥事をおこした者は決して容赦しない」(219)と恐れられている彼女なのです。今までアンブロシオの足元に身を投げ出して涙をそそぎ、手紙の送り主の子を身ごもっていることまで打ち明けて許しを乞うていたアグネスは、手紙が尼僧院長に手渡されると、態度も口調も変えて、修道院長を責めはじめます。

「あなたは今までどんな誘惑に打ち勝ってきたのですか。臆病者のあなたが！それから逃げるばかりで、誘惑と面と向かうなど一度もなかったはずです。でも審判の日がくれば、ああ、そのときになれば、抑えようもない情熱にあなたも屈してしまう。人間というものは心弱く過ちを犯しやすい存在だと思ひ知ることになるのです」（49）

やがて連れられていく地下牢での凄絶な体験にも耐え、生き抜いた者ならでの強い語調です。と同時に、この大胆な抗議には唐突で言い過ぎ、見当違いなところもあります。戒律を犯して尼僧院から逃れようとする尼僧を告発することが、どうして「臆病者」の行為なのか。脱出を図った彼女の側に非はないのか。初対面の院長の心の内を彼女はどのように知りえたのか。「審判の日」に彼を待つ運命をなぜ断言できるのか。それでも、アグネスの非難はアンブロシオの痛いところをついてはいたのです。院長職に就いたからには、都で最も高貴な美女たちの懺悔も聴くことになるだろう。しかしいまだ未熟で、性格も生来弱く、過ちも犯しやすいこの身は彼女らの魅力に冷静でいられるだろうか。このような不安にひそかに震えていた若い院長だったのです。これから彼が迎えることになる「人間というものは心弱く、過ちを犯しやすい存在だと思ひ知る」日々を、そうとは知らぬままアグネスは予告していたのです。

アグネスが投げつけたのとは正反対の言葉が、すぐにもアンブロシオの耳に届くこととなります。あの若い修道女には厳しい措置でありすぎたか（「気品のある身のこなしと端麗な容姿でひときわ目を引いた」（45）のであればなおさらに）と後悔も覚えながら、院長は僧院の中庭へ下りていきます。隠者の住処の岩屋を模して荒削りにつくられた亭のなかにロサリオがたたずんでいます。アンブロシオが格別に目をかけてきたその少年修道士は、院長と語りあい、気持ちが高まるままに、自分は実は女の身、ピラネガス家のマチルダであり、院長を慕うあまり男と偽り、修道院に入りこ

んだと打ち明けます。すぐにも修道院を去るように命じるほかにアンブロシオがとれる道はありません。説得をくり返す院長に、なお翻意を促してマチルダは熱く訴えかけます。

「聖人であるあなたを敬愛しているのです。あなたがただの凡人と知れば嫌悪感で背を向けるだけです。誘惑を恐れて私から離れるのですか。目をくらます世俗の快樂などには軽蔑以外の何の感情ももてないこの私から逃げるといいますか。人のもつ弱さなどとは無縁のあなただからこそ、これほどまでお慕いしている私を拒まれるのですか」
(63)

この甘美な言葉の誘惑にさえ首を縦にしない院長に、マチルダは懐剣を取り出し、命がけの行動に出ます。「彼女が自分の僧衣の前を引き裂くと胸が半ばむき出しにされた。刃物の先端が左の胸に突き立てられた。ああ、なんと美しい胸のふくらみであることか！月の光に照らし出されて、目にもまぶしい肌の白さが修道院長にもはっきり見てとれた。彼の視線は豊かな曲線に釘付けになった」(65)。真摯かつ必死の決意表明にはありません。ほんの少しでも目にさらされた(この時点ではマチルダの美貌はまだ頭巾で隠されたままです)肉体の誘惑に屈しての修道院長の次の言葉なのです。「これ以上は何も言うまい！ここに留まればいい、魔性の女よ。留まって私を破滅させるがいい」(同)。

アグネスが予告した「審判の日」はなんと足早に近づいてくることか。マチルダに火をつけられたアンブロシオの欲情は、これから予期せぬ事件が重なり、意外な事実も目まぐるしく明らかになるなかで、加速して燃え上がっていきます。「わずか24時間前には、そのことに思いをいたしただけでも恐ろしさで身もひるんだ破戒行為に今はふけるこの身だった」(227)。その速度に合わせて、急ぎ、彼が下り坂を駆け下りていく様を見

ておきます。マチルダに告白されたその夜、アンブロシオは彼女と抱き合う夢、すぐにも正夢となる夢を見ます。翌朝の金曜日、ついにあきらめて修道院を離れるというマチルダは、せめてなにか名残のものをと院長に所望します。バラの1枝を摘もうと伸ばした彼の手には、根元にひそんでいた毒蛇が咬みつきます（気候温暖とはいえ、王都マドリードに、それも修道院内に、猛毒を牙にもつ蛇など生息しているだろうか。悪意をもって仕掛けられた罠ではなかったのか）。激痛のあまり、マチルダの腕のなかに倒れこむアンブロシオ。そのまま意識を失った彼が、3日限りの命との見立てにもかかわらず、またたく間に回復する奇跡に周囲は驚き、これも院長の生得の聖性のなせる業かとあらためて感服します。⁴⁾ 院長自身の驚きは、見習い僧ロサリオとしてただ1人看病を許されたマチルダの素顔を見たときに訪れます。日ごろ彼が魅せられていた聖母像の聖母に生き写しなのです。さらなる驚きがマチルダから告げられます。アンブロシオが死を免れたのは奇跡ではなかった——倒れた彼の傷口に彼女が唇を寄せて毒液を吸い取っていたというのです。吸い取った毒に侵されたマチルダが死の床から呼びかければ、アンブロシオは背を向けつづけるなどできなくなるのです。

アンブロシオがマチルダに口づけし、その胸に顔をうずめた瞬間、場面は一転します。章も変わり、時間も少し前に戻り、第3章の冒頭は、まだ前日の木曜日の夜、自邸でラモンがロレンソに修道女アグネスへ手紙を渡したいきさつを話しはじめているところです。ドイツの「黒い森」での盗賊相手の冒険や古城にひそむ亡霊との遭遇にまで及んでラモンは語りつづけます。それだけでも独立した1編の物語にもなりそうなこの長い挿話は、巻をこえて第2巻第1章の終わりまでつづいていきます。同巻第2章の冒頭でようやくラモンが語り終え、ロレンソが屋敷を辞するころには、

(4) 『使徒行伝』28章、3節から6節で述べられる、蝮（欽定訳による）が手からみついたマルタ島でのパウロへの言及か。

すでに夜は白みはじめています。明ければ、尼僧院の庭木戸で真夜中に待つと例の手紙でラモンがアグネスに伝えた金曜日。その手紙が尼僧院長の手に渡ったなど知る由もないラモンとロレンソの2人は、約束の場ではむなしく時を過ごすしかありません。翌朝あらためて尼僧院を訪れたロレンソは妹との面会を拒まれます。アグネスは前日から病の床についているというのです。その後も毎日のようにロレンソは尼僧院を訪れます。その度に、アグネスの病状は回復するどころか悪化しているとの返事がくり返されるばかりです。妹の還俗を認める法王からの赦免状をたずさえて再度訪れたロレンソに尼僧院長は悲報を告げます。アグネス修道女はすでに病死して埋葬もすませたというのです。納得できるわけもない兄は事の真相を知ろうと手をつくす一方で、「凶暴かつ執念深い性格で、どんな非道なこともやりかねない女」(190)と悪評高い尼僧院長への復讐も誓います。このようにして「長い2ヵ月が過ぎていった」(220)。

次の第3章では、再びアンブロシオに焦点が移ります。時間も2ヵ月前の土曜日、ロレンソとラモンが尼僧院の外で現れるはずもないアグネスを待ちつづけて朝を迎えたその日にまで戻ります。マチルダと体を重ねてからの修道院長の周囲には、淫蕩の気配はもちろん、超自然の色合いも濃くなりはじめます。秘法を使って呼び出した墮天使の力を借りて、蛇の毒がまわった身を自ら浄化するマチルダ。そのマチルダにはない清純さをもつ、天使のごときアントニアと出会い、夢中になるアンブロシオ。その乙女の操を奪うための秘策——彼女の入浴姿も見られる魔法の鏡、扉も開けずに彼女の寝室に忍びこめる秘具——をアンブロシオに授けるマチルダ。それらの助けを借りてアントニアに近づき、これもマチルダから渡された霊薬を用いて彼女を仮死状態にし、偽りの埋葬を行うアンブロシオ。秘薬の効果で48時間後に蘇生するまで地下納骨堂に閉じこめておこう、蘇ったならすぐにも思いを果たそう、という算段なのです。

これら事件自体がそうなら、事件がつづいていく速度も尋常なものでは

ありません。マチルダとの愛欲におぼれたかと思えば、その後「1週間もたたないうちに彼は自分の愛人に飽いてきた」（235）。熱狂がさめたあとの虚脱感をうめるかのように、すぐにもアントニアが現れます（病床にある母のために懺悔聴聞僧を派遣してくれるよう依頼しに修道院を訪れたのです）。彼女の虜になったアンブロシオは聖職者としての道をさらに加速して踏み外していきます。「なんと足早に罪業を重ねてきたことかと振り、アンブロシオは思わず身を震わせるのだった」（355）。その罪業が発覚するのも遠いことではありません。逮捕の場面さえ（同日に行われる尼僧院長の逮捕劇とはちがいで）感情移入を挿して簡潔に（新聞記事のように）報告されるだけです。

彼の身は確保され、拘束された。同様の措置がマチルダにもとられた。頭巾をはずしてみると、端麗な顔立ち、豊かな金髪から女と判明し、新たな驚きを呼んだ。修道院長が投げ捨てた場所から凶器の短剣が見つかり、地下室がくまなく探索された後に、2人の罪人は異端審問所の獄舎へと連行されていった。

「わが身が汚れなき高德の士であったときから、ほんの数週間しかたっていないかった」（421）。このように修道院長は獄中で述懐しています。物語の冒頭で教会堂の説教壇に立ったときから、刺殺犯として牢内につながるまで、当人には「ほんの数週間」の時間経過でしかありません。その間、前述のように、青年貴族たちには2ヵ月以上もの時間が過ぎているというのにです。

なぜ時間進行が一致しなくなるのか。長距離間の時差はあるとしても、時間そのものに速度の違いなど生じるはずもありません。10週間ほどで書き上げたと作者が豪語したとされる小説にしては、時間経過上つじつまの合わない箇所は、ほかには特に見当たりません。作者自身の記述上の不

注意ではないとしたなら、アンブロシオ、ロレンソのどちらかが錯覚しているにことになります。そうである証として、「数週間」と「2ヵ月以上」の時間差にもかかわらず、小説の終局近くで彼らは確かに同じ日に、同じ場所に居合わせているのです。2人とも錯覚してもおかしくない状況にいます。解禁された欲望の奔流の速さはアンブロシオの時間感覚を惑わすほどの勢いです。妹の消息が知れず、知る手立てもない日々がロレンソには緩慢に過ぎていくと感じられたはずです。とはいえ、どちらが錯覚しているのかも、そして錯覚そのものも、小説のこれからの展開に大きくかわる伏線にはなりません。やはり時間の不一致は作者のささいな書き間違いにすぎないのか。だとしても、そのささいなことが見過ごせないのです。2人それぞれに流れる時間の速度があたかも異なるかのように(冒頭の場面でのただ1度の機会——そのときでもロレンソはアンブロシオには名も知らぬ聴衆の1人にすぎません——を除けば)アンブロシオとロレンソが出会いそうで出会わない状況がくり返されるからです。何らかの力が2人の対面を妨げているかのように。

巻頭の教会堂での場面以来、アンブロシオとロレンソは微妙な時間差で何度かすれ違います。説教が終わってからも修道院に残ったロレンソだけけれど、修道院長が再び姿を現す直前にそこから離れてしまいます。第2巻第2章では、アントニアが母と住むサンティアゴ通りの家にロレンソも訪ねていくけれど、それはアンブロシオがそこに通いはじめる以前のこと。その家で2人が鉢合わせする危険はありません(危険もなければ、緊迫した事態も生じません。そのような状況をつくりだすことは小説の主な関心事ではないようです)。小説も終わり近くの第3巻第4章で描かれる聖クララの祭日の夜、女子修道院の地下納骨堂という狭い閉鎖空間で2人が接近するとしても、顔を合わせることはなく、一瞬でもたがいの姿を見ることもありません。ここで地下納骨堂とはゴシック小説定番の舞台装置であると同時に、いくつにも枝分かれする地下道を配して、たがいにすぐ近く

にいる2人を行き違わせる格好の迷路としても選ばれているのです。以下に少し詳しく、その祭日当日の両者の動きを、いいかえれば、2人がいかに出会わないか（なぜ出会わないかは後回しにして）を見ていきます。

かつて修道院の教会堂に居合わせた主要人物たち — アンブロシオ、ロレンソ、アントニア、アグネスが、修道院とは庭と共同墓地をはさんで隣り合う聖クララ女子修道院付属の地下埋葬所に場所を移して再び集まります（この場面を描く第3巻第4章は、小説全編のなかで2つの物語を1つの章のなかに収める唯一の章です）。けれど、地下に下りてきた動機も理由もそれぞれ異なるのです。まず、当日のロレンソの行動を追ってみます。尼僧院長への疑念を枢機卿に訴え出ていた彼は、異端審問所から院長逮捕の認可状を得て、マドリードに帰ってきます。その日はアッシジの聖クララの祝祭日。祝祭の行列が出発するのを尼僧院正門前で待つ人々のなかに、隊長ドン・ラミレス指揮下の審問所の兵士たちとともにロレンソは身を隠します。行列に加わる尼僧院長が尼僧院から出てくるのを待ち構えるのです（そこまでの手配に追われていたロレンソには、アントニアの、そしてその母の二重の訃報 — 前者の死は偽装されたものだけれど — はまだ届いていません）。

祭礼を止めて執行された告発と逮捕は、ロレンソたちも予想していなかった騒乱を招くこととなります。神聖な祝祭のさなかの尼僧院長逮捕という異常事態を目の当たりにした民衆は、怒りにまかせた暴言を渦中の被疑者に浴びせかけます。そうすることで自ら興奮をつのらせ、理性も麻痺したのか、兵士たちにも止められない暴徒と化していくのです。磔を打たれ、血まみれになって倒れても、院長はまだ許されません。「もはや息絶えた彼女の肉体にも、暴徒は徒に怒りを発散していた。打ちすえ、踏みつけ、これでもかと痛みつけるのだった。かつての尼僧院長は無残にも人のものとは思われない、目をそむけたくなる肉塊に化してしまった」（356）。尼僧院そのものも怒りと暴力の標的になります。「聞こえてくる

のは悲鳴とうめき声のみ。女子修道院は火炎につつまれ、目の届く限り破壊と恐怖の一大修羅場と化していた」(358)。祈りと祝福の祭礼は暴力と流血の狂乱へと急転します。祈りと瞑想の日々を送っていた修道院長が、肉欲に身をまかせる破戒僧へ急降下していく様にも似ています。集団狂気に駆られた群集の暴走も、欲望に駆られたアンブロシオの暴走に重なるようです。

『修道士』のなかで過度の虐待を身にうける女性は尼僧院長1人に限りません。同じ聖クララ祭の夜、さらなる犠牲者をロレンソは目にすることとなります。騒乱がつづくなか、逃げまどう尼僧たちを救おうと女子修道院の庭に入った彼は、地下埋葬所への扉を開けて下りていく不審な人影を追い、兵士たちを引き連れて階段を下りていきます。地下道では、地上の難を逃れて身を寄せあう修道女たちに出会います。先ほど庭で見た人影は彼女たちのものだったのです。おびえる修道女たちをさらにおびえさせて地底から響く声を探って、ロレンソは隠された地下牢へとたどりつきます。闇と死臭と汚濁のなかに彼が眼にしたのは、鎖につながれた半裸の女、というよりも、かろうじて女と判別できる生き物です。その生き物の描写ではなく、それを見る側の反応の方をここでは引用しておきます。「恐ろしさのあまり、彼は立ちすくんだ。半ば嫌悪感、半ば憐憫の情で、その哀れなものを見すえた。あまりに陰惨な情景を前にして震えがきた。胸が悪くなった。体の力がぬげ、立っていることもかなわなくなるほどだった」(369)。地下の暗さのためもあります。すでに亡きものとあきらめていたこともあります。しかし、なによりも面ざしのあまりの変り様に、兄のロレンソでさえ、その女囚が尼僧院長の厳命で監禁されていた妹の変り果てた姿だとは確認できようもなかったのです。地下墓所の隠し牢に閉じこめられて、どうにか自らの命だけはつないできたアグネスだと分かりようもなかったのです。自らの命だけは、というのも、そこで彼女が産み落とした幼い命は、当然ながら、すぐにも息絶えてしまうからで

す。

同じ地下墓所には、さらにもう1人の犠牲者が閉じこめられています。アントニアです。死の1歩手前で救出されるアグネスとはちがひ、アントニアにはあと1歩のところで救いの手は届きません。拉致され、監禁され、陵辱されて、傷だらけのまま再び監禁されようとする墓穴から彼女は隙を見て走り逃げます。しかし、すぐにもアンブロシオに追いつかれてしまいます。抵抗するその悲鳴を地下通路に集結しているという兵士たちに聞かれるのを恐れ、アンブロシオは彼女の胸に短剣を突き刺し、逃走します。わずかに遅れて犯行現場にたどりつくロレンソ。ここでも2人はすれ違い、たがひの姿を目にすることもありません。逃げゆく修道院長の背中を一瞬、松明の明りの向こうに見たのは兵士長のドン・ラミレスであって、ロレンソではないのです。アントニアの叫び声を耳にして駆けつけても、瀕死の恋人を介抱するのが先で、逃げ去る殺害犯を目で追う余裕も彼にはなかったのです。犯人追跡にも加わりません。犯人逮捕の場にも居合わせません。それどころか、悲しみのあまり「不幸なアントニアと変わらぬ死人のようになってメディナの館にまで運ばれてきた」（393）。

少し時間を戻して、同夜のアンブロシオの方の行動を見てみます。祝祭日が暮れるのを待ちかねて修道院長が地下墓所に下りていったのは、そこに閉じこめておいたアントニアの純潔を奪うためです。邪悪な思いに心奪われるあまり「アンブロシオは自分のすぐ近くで起こっている恐るべき光景に気づくことはなかった」（377）。地上での暴動の嵐だけでなく、地下にいる自分のすぐそばでのアグネスの発見と救出にも気づかないでいます。彼の視線は、眠りから覚めた場所が墓場と知り、恐れおののくアントニアに向けられたままなのです。それからアンブロシオは何をしたのか——甘言を重ねても無駄と知ると、ついには力づくで彼女を思いのままにするとだけ述べるにとどめておきます。死装束を身につけただけの乙女を犯すという死姦嗜好、卑しい望みをとげたあとに襲う自己嫌悪などについ

てはふれずにおきます。やがて、その場にマチルダが現れ、周囲の差し迫った状況によりやく彼の注意を向けさせます。「『この地下墓地は武装した兵士たちであふれているわ。メディナのロレンソが異端審問所の役人を何人か引き連れて納骨堂をくまなく探索しているのよ。どの通路にも兵士が歩き回っていて […] アントニアはいずれ見つかってしまう。そうなれば、あなたは永遠に破滅よ』」(389)。このときはじめて、小説のなかではじめて、修道院長はロレンソの名を耳にするのです。「『メディナのロレンソ? 異端審問所の役人? そんな連中が何をしにここまで来ているのだ』」(同)。アグネスの僧衣から落ちた手紙を拾いはしたけれど(そこにはドン・ラモンの名が記されていなかったために)送り主が誰かも、アグネスに兄がいることもアンブロシオは知ることはなかったのです。であれば、その兄ロレンソこそ自分の恋敵だと気づくはずもありません。ロレンソとは誰で、何のために地下墓所にまで下りてきたのか。このときも、これからも、その答えをアンブロシオが知ることはありません。答を得る前に捕縛され、引き立てられ、投獄されてしまうのですから。

ロレンソという存在についてアンブロシオが無知のままなら、ロレンソのほうも、かつてその説教に深い感銘を受けた人物が自分とその周囲に暗い影を投げかけるだろうとは、その寸前まで想像もおよばないでいます。原典では1頁分にもわたる修道院長の詳しい個人情報を小説の冒頭で読者に与えてくれたのは、ほかでもないロレンソです。その彼が「1人の尼僧の偽善を暴こうと心をくだしているその間、もう1人の偽善者[修道院長]が自分に悲劇をもたらそうとしているなど、知る由もなかった」(295-6)のです。その悲劇——地下納骨堂での惨劇が起こったときでも、それが修道院長のもたらしたものとロレンソが認めていたかどうかさえ確かではありません。当然、事件の詳細は伝えられただろうけれど、犯人の名さえ彼の口から出ることもないからです。「アントニアの死は、それに伴う恐ろしい事件とともに彼の心に重くのしかかった。憔悴して影のようになった

彼を和ませるものなど何一つもなかった。このままでは命も危ういからと滋養をとらせるだけでも一苦勞だった」（400）。恋人を失った衝撃はこのように説明されるのに、怒りであれ、驚きであれ、殺害犯に対する心情についての記述は一切ありません。アンブロシオとその凶行のことなど無関心か、忘れてるか（どちらもありえないはずなのに）のような印象さえ与えるのです。

聖人の誉れ高い修道院長を凶悪犯として公表するのをドン・ラミレスは差し控えます。公表すれば、女子修道院を焼き払った暴動の残り火を再びかき立てかねないと恐れたからです。にもかかわらず、口止めしておいた配下の兵卒の1人から犯人の名がもれてしまいます。「マドリード市中を大いなる衝撃が走った」（420）というけれど、ロレンソやドン・ラモンたちの反応だけは読者に知らされません。「マドリードのどこであろうと、彼〔アンブロシオ〕が有罪か無罪かの議論で大騒ぎになった」（421）とはいえ、事件の渦中にいるはずのロレンソたちの間では、破戒僧とその犯罪は話題になることもないのです。

黒魔術師アンブロシオが悪魔に連れ去られたという話はマドリード中に噂となってひろまった。[...] しかし次第に人々の話題に上らなくなった。ほかにも目新しい事件が起こり、そちらのもの珍しさに皆の関心が移ってしまったのだ。このようにして、まもなくアンブロシオはまったく忘れられてしまった。まるで、彼という人間がはじめから存在していなかったように。（438）

マドリード市民がそうするより前に、青年貴族たちからすでに「彼という人間がはじめから存在していなかったよう」な扱いをうける修道院長なのです。

死の淵からの生還を語るアグネスもまた、修道院長には1度も言及して

いません。彼女の獄中記は『修道士』のなかでも際立ってゴシック趣味とグロテスク嗜好にあふれた挿話です。いわれもない罪に問われ、納骨堂の闇の奥に鎖につながれた若き美女。とはいえ、その美貌は乱れた髪に隠れて見えず、見えたとしても、今はその面影もない。周囲には白骨化して重なりあう遺骸の数々、うごめく爬虫類や両棲類、自分がそこで産み落とした嬰兒の死体、その腐肉に群がるうじ虫。死臭と腐臭に満ちた生き地獄の細部にまで言及する語り手も、そのような極限状況に自分を閉じこめた張本人の名にだけはふれてはいません。かつてアンブロシオに向かい激しく非難の言葉を連ねていた彼女が、彼への憎しみも恨みも口にしていないのです(犯罪者アンブロシオについて口を閉ざすことではアントニアも同じです。わが身を辱めた上に致命傷も与えたのは誰か、ロレンソに教えないまま事切れているのです。けれど、アグネスのそれほどには不自然な沈黙ではありません。呪われた者の名を口に出すことで、恋人に抱かれて召されていく幸せを汚すまいとした、でなければ、声を出す体力さえ残っていません)。なかつただけ、とも考えられます)。

自分たちに不幸と災厄をもたらした憎むべき敵を、なぜ青年貴族たちは黙殺するのか。教会堂であれほど詳しくアンブロシオの来歴について語り、その説教に感服もしたロレンソから、犯罪者に堕ちた修道院長について、なぜ何の発言もないのか。新しい恋人ビルヘニア・デ・ビラ＝フランカが亡き人に劣らず美しくも心やさしき女性なら、そして悲しい過去は忘れるべきなら「アントニアの面影も次第に彼の胸から消え失せていき、ビルヘニアが彼の心をしめる唯一人の女性となった」(419-20)のも不自然とはいえません。それでも、アンブロシオにかかわる記憶だけが「次第に」どころか一瞬のうちに失われてしまう不自然さは残るのです。青年貴族たちの前からだけでなく彼らの記憶からも、なぜアンブロシオは消えていくのか。これに加えて、なぜアンブロシオとロレンソはすれ違うのか、という先の疑問にも一応の答を出すべく、以下の試論とします。

アンブロシオの物語とロレンソたちの物語、これら相容れない両者にも接点があるとすれば、それは身分違いの恋愛です。この接点は、しかし、分岐点にもなります。階級など無視した情熱が2つを近づけるなら、その情熱を許そうとはしない反発力も生じるのです。「スペインでも最も高貴な家柄」(24)である一族の跡継ぎながら、平民の娘の魅力に心奪われるロレンソ。その友人にかけるドン・クリストバルの言葉には、いつもの軽い冷やかしの口調よりも違反行為を警告する響きがあります。

「ねえ、ドン・ロレンソ、君はまさか『コルドバでも1番の律義者で勤勉な靴職人の孫娘』を妻に迎えようなどと馬鹿げたことを考えてはいないだろうね」

「忘れていぞ、彼女は先代のシステルナス侯爵の孫娘でもあるということ。いや、生まれや肩書きなどはぬきにして、アントニアほど心引かれる女性には今まで会ったことはないと言言できる」

「それは認めよう。しかし、結婚するなんて本気なのか」

「なぜいけないのだ、伯爵。2人でやっていけるだけの十分な資産を僕は受け継ぐのだし、こういうことに叔父が寛大なのは君も承知のはずだ」(24)

アントニアの母も娘を諭します。「あの人がおまえの愛情に報いてくれることは一目でわかります。けれど、愛によって結ばれても、その先はどうなるというの。[...]自分を迎え入れてくれない家に嫁いだ女がどれほどの悲哀を耐え忍ばなければならないか、悲しい経験で知っている私がそう言うのですよ」(206)。そう、アントニア自身が身分違いの結婚から生まれているのです。母親は娘の求婚者にも、若さと情熱にまかせて過ちをくり返すことのないよう説得しています。「高い代償を払って、釣り合わない結婚をした者に下される天罰を私は身をもって知りました。夫の親

族の反対を押し切ってシステルナス公爵と結婚した私です。そのような身のほど知らずのことをしたおかげで、辛酸をなめつくしてきたのです」(212)。30年ほど前、システルナス侯爵家を継ぐべき長子の伯爵(先代侯爵の前妻の子であり、現侯爵ドン・ラモンの腹違いの兄)はコルドバの職人の娘エルピラ・ダルファとひそかに結婚し、1子までなしていたのです。これを知った父親、先代のシステルナス侯は婚姻関係を無効にすべく自ら乗り出します。当時を振り返るのはエルピラの妹レオネラです。

「前にも申し上げましたように、1人の青年貴族が姉と恋に落ち、自分の父親には内緒で結婚をいたしました。婚姻関係は3年近くも隠しとおされましたが、ついには老侯爵の知るところになったのです。ご承知のとおり、うれしい知らせであるわけではありません。すぐにもエルピラを捕らえるべくコルドバまで大急ぎで駆けつけてきました。しかし、姉はすでに追っ手を逃れ、夫と手を取りあい西インド諸島へ旅立ったあとでした。それを知ったときの老侯爵の怒りたるや、凄まじいものでした。まるで悪魔にとりつかれたように、われわれ親族に口をきわめて罵声を浴びせかけました。そして私どもの父、コルドバでも1番の律義者で勤勉な靴職人を投獄し、帰りがけには、妹のまだ2歳にもならない男の子を情け容赦なく奪い去ってもいったのです。急いで逃げ出さねばならない慌ただしさのなかで、姉たちが私どもに預けていったその子を」(13)

小説の開巻まもなく聞こえてくるこの回想は、登場人物の人間関係がまだおぼろげな読者には、口の悪いクリストバルの表現を借りれば「おしゃべり鬼婆」(26)の昔話として聞き流されそうです。けれど、この事件こそすべての発端なのです。ここで荒々しく巻かれたネジは、その後も止まることなく物語の背後で動きつづけ、次世代の者たち、つまり小説の主要登

場人物たちを巻きこんでいきます。奪いとられた男の子はカプチン会修道院の門前にうち棄てられます。そこで拾われ、長じて同修道院の最高位に昇りつめ、満都の崇敬を集めるまでになります。夫に先立たれたエルピラは、逃亡の地で生まれた、まだ幼いアントニアを連れて帰国してきます。意外にも老侯爵は親子を迎え入れます。それ以上は何も要求しないという条件付きながらも、ムルシア地方の自分の領主館に住むことを許し、いくばくかの支給金まで与えたのです。10数年後、その支給は侯爵の死とともに途絶えることとなります。その窮状を当代の侯爵に訴えるために母と娘はマドリードにまで出てきたのです。都では、その名も高いアンブロシオが説教を行う修道院でアントニアはロレンソと出会います（彼もマドリードに着いたばかりです）。その直後ロレンソは、アントニアの叔母からその名が出たばかりの現システルナス侯爵ドン・ラモンと再会します（ラモンもまた都に戻って間がありません）。そしてラモンは亡き兄が残した妻と娘へのできる限りの援助を約束します。先代侯爵が過去に力づくで切り離したはずの縁の糸がマドリードの都で再び結ばれようとしているところから、小説ははじまるのです。

ロレンソはシステルナス家を継ぐ者ではありません。けれど、老侯爵の後添いが生んだ男子（秘密結婚をし、後に早世した伯爵の腹違いの弟）である現システルナス侯ドン・ラモンは、メディナ家のロレンソの妹アグネスの婚約者なのです。ロレンソとアントニアが結ばれ、つづけてロレンソの妹アグネスとラモンの婚姻が成立するなら、由緒正しきシステルナスの血筋が（間接にはあれ）汚される危機が再び生じることとなります。その危機を防ごうにも、もはや老侯爵はこの世の人ではありません。健在だったとしても、他家の子弟の結婚問題にまで介入できるはずもありません。しかし事態は故人が望んだとおりに、というより、それ以上に望ましい形で收拾されていきます。身分違いの結婚は回避され、アンブロシオとロレンソ、そしてラモンが血縁関係で結ばれるような事態は避けられま

す。身分違いどころか、聖クララ女子修道院の有力寄進者である資産家の娘ビルヘニアとロレンソとの婚約がととのいます。そしてメディナとシステルナスの名門同士がようやく姻戚関係を寿ぐことになるのです。

修道院長の物語が彼の死によって終わるなら、若き貴顕紳士たちの物語は彼らの結婚で閉じられます。前者が許されざる結婚からはじまるなら、後者の幕を下ろすのは祝福された(それも複数の)結婚なのです。ビルヘニアとロレンソとの結婚、そしてアグネスとラモンとの改めての正式の結婚。これら終幕の晴れやかさのなかに、かつて彼らの幸福を脅かした破戒僧アンブロシオの暗い影が一瞬でもさしこむことはありません。影どころか、本人自身がロレンやソラモンたちの前から、マドリード市内から、この世からも消えている、正確に言えば、消されているからです。王都の有力者の子息たちの前途を祝うかのように、翼ある悪魔が牢獄から連れ去ってしまったのです。火あぶりの刑場へと引き立てられる直前、死刑囚は異端審問所の牢獄から遠い異郷の山間にまで運ばれ、ひそかに処刑されます。空の高みへと悪魔に運ばれたかと思うと、真下の峡谷へとつき落とされます。四肢の骨が砕けてもまだ命あるアンブロシオは、身動きもできないまま、流れ出る血を無数の虫に吸われ、生身を猛禽につばまれながら、緩慢な死を待つしかありません。一方、都では公開処刑が行われなくなり、物見高い民衆に忌まわしい犯罪を思い出させる機会もないまま、事件は幕切れとなります。事件との関連でシステルナス、メディア両家の名が表沙汰になることもなくなります。それだけ早く事件は忘れられ、それだけ華やかに両家の婚儀がとり行われることとなります。「それからの歳月、ラモンとアグネス、ロレンソとビルヘニアは、人間がこの世で享受できる限りの幸せのうちに過ごした」(420)。

これら悲慘と至福とは、2つの物語に別々に用意された結末ではありません。同じ1つの物語が行き着く光と影として並列されているのです。悪魔ルシファーとの契約からはじまる物語が迎える、表裏一体をなす結末な

のです。悪魔との契約 — それは小説も終わり近くでアンブロシオが結ぶものではなかったか。しかし、もう1人、必死の願いを悪鬼の者に託した人物がいた。アンブロシオのそれとはちがい、こちらの契約は小説がはじまる前すでにとり交わされていた。契約相手が裏切らなかつたのもアンブロシオの場合とはちがっていた。その契約が着実に履行されていく過程こそ小説の今までの展開であった。このように仮定してみると、先に不自然だとしていくつかの状況にも、別の説明ができそうです。不自然と見えたのも、その裏に超自然の力が働いていたからだ。もとより『修道士』の物語の背後には、この世ならぬ悪意の力が隠れています。ただ、その力にすぎたのはアンブロシオ1人ではなかつた、として以下に論をつづけます。

魔界の者と取引をしたもう1人の人物とは誰か。悪魔がアンブロシオをこの世から追放した仕方が暗示しています。拉致し、そして遺棄するというその手口は、取引相手の過去の同様の行為に倣っていたのです。30年ほど前、幼児アンブロシオを拐かし、棄てたのはドン・ラモンの父親、先代のシステルナス侯爵その人です。

悪魔と通じなければならない、どんな理由が先代侯爵にはあつたのか。やはり、あの過去の事件に遠因があります。レオネラを目撃証言にあるように、わが息子の秘密結婚を妨害できなかった侯爵は、怒りにまかせてエルピラの父親を捕らえて投獄し、残された幼子を親族のもとから奪いとっていきます。それでも、悪しき根を刈りとり、悪しき種を摘みとるまではできなかったのです。一足遅れでエルピラには海の彼方へ逃げられてしまいます。少なくとも半分はシステルナス家の血が流れているためか、奪いとってきた幼子の命まで絶つことはできず、修道院の前に棄ておくしかなかつたのです。大西洋がエルピラをはるか遠くに引き離すなら、修道院の壁がアンブロシオを外の世界から守ることになったのです。夫に先立たれたエルピラがまだ幼い娘とともに帰国したとき、許しがたい結婚を清算で

きなかった老侯爵の後悔の念が再燃します。彼女たちを受け入れたのは表向きの措置にすぎなかったのです。「墓に入るまでエルビラへの憎しみを忘れず、長男の未亡人がその後どうなったのか、生前にほのめかすこともなかった」(193) 彼がエルビラ親子に温情などかけるはずもありません。実際、母と娘は決して厚遇されてはいません。「夫の家族から絶縁された上に、どうにか命をつなぎ、娘を養育していただけても足りないお手当てだけで暮らしていたのです」(211)。田舎の城館に彼女らを住ませたのは、実情は幽閉したに変わらないのは、その親子をマドリッドに、ひいてはシステルナス家に近づけないための方策だったのです。システルナス家には恥辱にして、その安泰を脅かす危険因子にもなりうる母娘を亡きものにするのに代わる代替策にすぎなかったのです。それほどまでに、その母娘はシステルナス家への脅威だったのか。この疑問さえよぎらなかつたほど、先代侯爵は2人への憎悪にとりつかれていたとしか言いようがありません。

思いが及ばなかったことが侯爵にはもう1つあった — 支給金がとめられたエルビラがアントニアとともに、生活の支援を求めてマドリッドへ出てくるなど、生前の彼は想定もしていなかったのです。都でのロレンソとの偶然の出会いもあって、現侯爵から厚情を受ける手はずが早くも整います。しかし、その後の不幸への逆転については先に述べたとおりです。亡き侯爵の私怨が墓の彼方からよみがえり、エルビラがシステルナス家と再び接触するのを妨害したかのようです。実際、自然の法則を超えた力が「迷信という専制権力が支配する都」マドリッドの一隅で確かに働いていたのです。息子の禁じられた結婚を阻止できなかった侯爵の30年前の無念を、その霊力が悪魔の力を借りて晴らしたのです。かつてコルドバでエルビラの家族に虐待したときの侯爵を「まるで悪霊にとりつかれたよう」だったとレオネラは思い返しています。けれど順序は逆で、「傲慢」「支配欲」「無慈悲」(28) につき動かされた彼の非道に悪鬼の方が呼び寄せられた

のです（上の3つの話は、第1巻第1章でロレンソが見る夢のなかに現れてアントニアに乱暴を働く魔物の額に刻印されていたものです）。以来、侯爵にとりついた悪鬼は、その魂をもらいうける好機を待ち構えていたのです。臨終の床での侯爵の尋常ではない容態も、ついに魔物に身も心もゆだねた者の末期と見れば納得できます。現侯爵によれば、彼の父は「一見して病状は重く、死相がはっきりと現れていたものの、それから数ヶ月も生き長らえていた」（188）。生死をさまよう老人に魔性の声がささやきつづけていたのです。おまえが死ねば、おまえには好ましくない状況が再現されるだろう。だが、こちらには、おまえの大事な家の名誉と繁栄を邪魔立てするものを排除してやる力も用意もある。ただし、その代償として、おまえも一緒に地獄へ来てもらおう、悪鬼どもの仲間に加わってもらおう……。契約が成立したとき、ようやく病人は息絶えたのです。

母と娘はアンブロシオの迷走する欲情に巻きこまれた罪なき犠牲者ではなかった、彼女たちを自分たちの聖域から切り離すことこそ、老侯爵が悪魔との取引に託した条件だったのです。だとすれば、なぜ取引相手は、ひたすらアンブロシオだけを標的と定めているのか。悪魔が先代侯爵に取引を迫ったのは、彼の望みと自らの利害とが合致していたからです。侯爵との取引を果たすことで、邪魔者アンブロシオの存在を排除するという己が目的をとげようとしていたのです。若き修道院長を慢心と虚栄におぼれた偽善者と言いつつの悪魔も、彼は聖職者としてまれに見る資質の持ち主だと察知していてもいたのではないか。30代の青年僧の身であれば、未熟で心弱いところもあるのは本人も認めるところ。けれど、さらなる厳しい修行を積んだ将来は、今でも聴き手を感動させる説教の巧みさとその内容の深さから見てとれるように、評判どおりの聖徳を（半分は受け継いでいる高貴な血とともに）身につけた、まさに生ける聖人となると危惧していたのではないか。そうなる前に、自ら手を下してまでも討つべき宿敵とみなしていたのではないか。でなければ（悪魔ならではの嗜虐趣味は別にして）あ

れほど執拗に修道院長を心身ともに責め苛んだ説明がつかなくなります。悪魔が彼を牢獄から連れ去ったのには、異端審問所の死刑執行人などに任せることなく、自分の敵は自分の手で葬り去らねば、という動機もあったのです。

残酷に、だからこそ完璧に、悪魔は契約を果たしていきます。彼女たちに殺意さえ抱いていただろう侯爵も、ムルシアに暮らすエルピラ親子のもとに刺客を送るまでの狂気には走っていません。少なくともアントニアは長男の忘れ形見であるのを忘れないだけの、そして、万が一にも陰謀が発覚すれば、それこそ家名が汚れるのを恐れるだけの正気は保っていたのです。しかし、悪魔の方は最終手段を選んで迷うことはありません。2人を抹殺するのに何のためらいもありません。ためらいと見えるのは、実際に手を下すときまで、念入りにも手間をかけて事を運んでいく執拗さなのです。獲物を捕らえるのに加えて、それを罫に追いつめていく過程をも楽しんでいたので(破滅への迷路にアンブロシオを追いつめた自分の手並みを本人に披露するときの悪魔のうれしげな口調が思い出されます)。細かい手順を省けば、次のような過程を。自らは身をひそめて、実行犯としてアンブロシオを使う。性の悦楽という餌で彼を誘い、墮落の道へ導き入れる。その途上で、血縁の事実は伏せたまま、母親の命を奪わせる。さらには、実の妹まで手にかけてさせる。その犯罪を暴いて官憲に引き渡し、罪人に極刑が下されるように仕向ける。この間、真犯人である自分の存在を隠し通すのなら、契約相手あるいは共犯者の存在を表に出すこともありません。システルナス家のあずかり知らないところで、彼らとは何の縁もない一連の事件の被害者と加害者として、親子3人は命を落としていくのです。

悪魔は青年貴族たちにも魔力をかけていたのです。彼らを操り、アンブロシオ本人に接触させないように、彼の周辺にも踏みこませないようにしていたのです。教会でのただ1度の機会から後は、ロレンソがアンブロシ

オと顔を合わせていないのは前にも述べたとおりです。ドン・クリストバルは教会堂の場面以来、物語の表舞台から退いてしまいます。修道院長の説教を聴いての彼の反応や感想についても何もふれられません。ドン・ラモンになると修道院長の顔さえ知りません（小説での彼の主な活躍の舞台はマドリードからはるか遠くのババリア地方に限られています）。彼女に寄せる熱い思いとは逆に、ロレンソがアントニアに会える時間もごく限られています。教会堂ではじめて出会った後は、サンティアゴ通りの彼女の住まいを2度訪れているだけです（いつも2人きりになれるわけでもありません）。「母親のエルビラに会いにきてからは彼の顔を見ることもなくなったので、彼女の胸に宿ったロレンソの残像も日ごとに薄らいできた」（260）ほど、恋人たちが共有できた時間はわずかなのです。アンブロシオはアグネスとも2度は顔を合わせていません。監禁された彼女を目にする機会がなかったわけではありません。地下墓所のなかに響いてくる苦痛と悲哀に満ちたうめき声を耳にして、囚われたあの尼僧の嘆きの声だと気づきます。同情も悔恨も覚えます。しかし、それも一瞬のこと、すぐにも目前の快樂に心奪われ、女囚のことなど失念してしまうのです。

悪魔の企てとはいえ、取引相手の意向を聞き入れて実行されていきます。青年貴族たちをアンブロシオとその親族からできるだけ切り離したのも、彼らに破戒僧とその犯罪の累が及ぶのを避けるためだったのです（そのためにはなら、どちらか一方の、あるいは双方の時間感覚を狂わせもしたかもしれません）。けれど、悪魔ならではの逸脱に走ることもなります。人間たちを思うように操る快感それ自体を先行させていったのです。老侯爵との取引要件にはないことにも立ち入って、人間たちを駒に見立てた1人遊びを楽しむことになったのです。

アンブロシオという存在を地上から消すだけでは悪魔は満足していません。契約事項にはないとしても、修道院長が「はじめから存在していなかったように」思わせるという最後の仕上げにとりかかるのです。マド

リード市民が修道院長とその醜聞を忘れてしまうのは、熱しやすく冷めやすい性向のためかもしれません。しかし、ロレンソたちの場合は事情がちがっていた、修道院長についての彼らの記憶は魔力によって強引にも消されていた——と断定したくなるのも、前述のように、アンブロシオがもたらした苦痛と悲慘とを若き貴顕紳士たちが不自然なまでに見事に忘れ去っているからです。「人間がこの世で享受できる限りの幸せ」を約束されたにしてみれば、最終章での彼らには以前のような生気に欠けるところがあります。無上の幸福にひたって休眠状態にある、というよりも、記憶の一部を奪われたための一種の放心状態にあるような活気のなさなのです。彼らの生の声さえ聞こえてこなくなります。地下墓所での事件以来、ロレンソ側の登場人物たちの間では「破戒僧とその犯罪は話題になることもない」と以前に記したのは実は正確ではありません。彼らの話し声が聞こえてこなくなるために、どんなことが話題になったのかも分からないからです。後日談が手早く報告され、物語が足早に終わりを迎えるまで、彼らの会話が聞こえてくることはありません。記憶ばかりか声さえも奪われた、とまではいわないまでも、アンブロシオが捕らえられた時点で、小説のなかでの彼らの役割は終わったのだという印象が残ります。悪徳に走るアンブロシオの引き立て役として「みな有徳の貴人たち」⁽⁵⁾であって来た存在理由が奪われたのだという印象が残るのです。

「みな有徳の貴人たち」だとしても、彼らそれぞれの性向は描き分けられています。例えば、ロレンソが律儀なまでに法の手続きを踏みながら妹の復讐を果たそうとするのに対し、恋人を救い出すためなら法を破るのも厭わないのがラモンです。⁽⁶⁾しかし、その姿形、顔立ちとなるとどうか。それぞれに不鮮明で、1人1人の区別がつかねるのです。ドン・ロレ

(5) Elizabeth MacAndrew, *The Gothic Tradition in Fiction* (New York: Columbia University Press, 1979), 73.

(6) 小池滋、志村正雄、富山太佳夫(共編)『城と眩暈：ゴシックを読む』(国書刊行会、1982)所収の富山太佳夫『「修道士」の対比構造』、374-389を参照のこと。

ンソとドン・クリストバルは「2人とも若く、立派な身なりをしていた」（8）と紹介されるだけです。ほとんど何も紹介されていないに変わりません。ドン・ラモンにいたっては、一言の外見描写も与えられていません。絵に描いたような幸福を授かる彼らにも、絵としての個性、独自にして鮮明な容貌と容姿ばかりは授けられていないのです。読者それぞれが抱く青年貴族の理想像を思い描けばよいのかもしれませんが。まさに理想の結末を迎える彼らなのですから。それとも、アンブロシオの引き立て役として以上の詳細な外面描写は特に必要ないということなのか。

一方、最初に登場するときから、アンブロシオの肖像は綿密すぎるまでに描きこまれています。たとえ、その厳しくも端正な容貌が、それ以上に綿密に描かれることになる内なる情念をおおい隠し、際立たせもする外面にすぎないとしても。

堂々とした体躯に、際立って整った顔立ち。鼻梁は秀でて鋭く、大きな瞳は黒くきらめいていた。眉は濃く、左右につながりそうだ。色白とはいえないとしても、顔色はくすんではない。修行と瞑想の日々を重ねた頬からは血の気が失せてはいたが、髪を剃った、なめらかな額には心の平安が支配していた。顔立ち1つ1つから見てとれる自足感は、この人物が心配事や罪悪などとは無縁であることを公言しているようだった。（18）

小説の終局で、ロレンソたちが読者から遠く離れていくようなら、アンブロシオは実際にマドリードからはるか遠く、どことも知れない辺境へと連れ去られます。とはいえ、姿が見えなくなるどころか、その命のつきる現場にまで読者は立ち会うのです。初登場のときにそうであったように、この最後の場面でも、描写のレンズは被写体に近づいていきます。骨は打ち砕かれ、肉は引き裂かれ、眼球はくり抜かれ、血は吸い取られてもまだ、

とどめを刺されずに放置される彼に近づくのです。嵐によって勢いを増した急流にやがて流され、肉体の痕跡さえ残すことなく消えていくまでを追っていきます。殉教者のそれさえ連想させる、この凄惨な最期のためだけではありません。ここにいたるまで「アンブロシオのような極悪人でも、読者から何らかの共感を得るべく描かれていること」⁽⁷⁾からも、俗世からは忘れ去られたアンブロシオこそ読者の記憶から消えることはないのです。

(本学法学部教授)

(7) MacAndrew, 90.